平成20年度（2008年度）

国際教育
地球市民を地域とともに育てよう　Part 7
報　告　書

財団法人　滋賀県国際協会

目　　次

◇　はじめに ･･･ 1
◇　目　　次 ･･･ 2

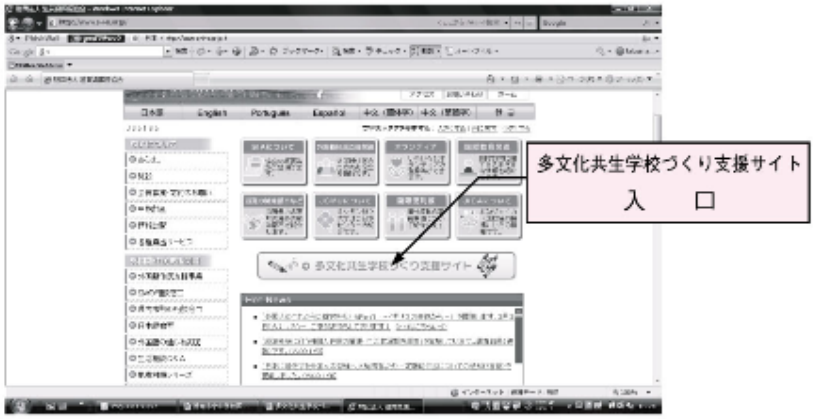
実績報告

◇　**国際教育ワークショップ** ･･･ 3
「地球市民を地域とともに育てよう　Part 7
　ケータイとチョコができるまで～大量消費社会の裏側をのぞいてみよう～」
講　師　（特活）開発教育協会会員　　吉田　里織さん
　　（特活）ACE　理事・事務局長　　白木　朋子さん
開催日　平成20年8月16日（土）　会場　ピアザ淡海　207会議室
主　催　財団法人滋賀県国際協会
共　催　独立行政法人国際協力機構大阪国際センター、国際教育研究会　Glocal net Shiga

資 料 集

◇　滋賀県における外国人登録者数 ･････････････････････････････････ 29
◇　国際教育研究会　Glocal net Shiga ･････････････････････････････ 30
　・新教材　「非識字体験ゲーム　ここは、何色？」開発中です。･････････ 32
　・「世界がもし100人の村だったらワークショップ＜環境編＞」実践報告 ･･･ 34
◇　国際教育・開発教育貸出教材リスト ･････････････････････････････ 36
◇　多言語学校用語翻訳集 ･･･ 45
※当協会HP「多文化共生学校づくり支援サイト」内にもExcel形式で公開しています。

「多文化共生学校づくり支援サイト」　http://www.s-i-a.or.jp
ぜひ、ご活用ください。



は じ め に

アメリカのサブプライムローン問題に端を発し、全世界に100年に一度といわれる経済不況の嵐が吹き荒れ、滋賀県内では、非正規労働者として製造業に従事していた外国籍住民の多くが、雇い止めや解雇という状況に追い込まれています。

そうした中、外国人学校の授業料を納めることが難しくなる家庭も多く、地域の公立学校へ転入してくる子どもたちも増えている現状があり、当事者である子どもたちはもちろんのこと、受け入れる地域の学校側も期待と不安の入り混じった新年度を迎えておられるのではないかと思います。

平成19年度実施した「国際教育・多文化共生教育スタディツアー」では、横浜市立いちょう小学校等を訪問し、外国にルーツをもつ子どもたちも日本の子どもたちも安心して楽しく過ごせる学校づくりに向けた実践の数々を紹介いただき、すばらしい事例を学ぶことができました。そこで平成20年度は、そうした学びから２つのプロジェクトに取り組みました。一つは、「国際教育研究会　Glocal net Shiga」による非識字体験オリジナル教材の研究開発。もう一つは、当協会ホームページ上での「多文化共生学校づくり支援サイト」の開設です。

教材開発では、その国の文字が読めないと、どんなに不安な思いで、またどんなに不都合な状況の中で生活しているのかを疑似体験できるようなオリジナル教材の開発に取り組みました。導入に活用できるアクティビティとして「非識字体験ゲーム　ここは、何色？」の試作品を作成し、次年度も引き続き、より深みのあるアクティビティの開発を目指していきます。また、新規サイト「多文化共生学校づくり支援サイト　(http://www.s-i-a.or.jp)」では、6言語（ポルトガル語、スペイン語、英語、中国語、タガログ語、ハングル）に対応し、オリジナルの時間割表や校内標示が作成できるようになっています。公立学校へ転入してきた子どもたちが、スムーズに、また安心して日本の学校生活をスタートできるようにという願いを込めて作成しました。そして、こうしたツールを活用することで、日本の子どもたちにとっても、世界の多様な文化に日常的に触れることで自然と国際感覚が身につくのでは、という期待もあります。

平成20年度に実施しました国際教育事業の成果をまとめました。今後も、「グローバリゼーション」や「多文化共生」などについて、みなさんとともに考えていきたいと思います。

（財）滋賀県国際協会

平成20年度（2007年）国際教育ワークショップ

「地球市民を地域とともに育てよう　Part.7
ケータイとチョコができるまで～大量消費社会の裏側をのぞいてみよう～」

今や、わたしたちの生活には欠かせなくなってしまった携帯電話。
しかし、わたしたちの手に届くまでには、
この携帯電話が世界各地で紛争の火種になるなど
様々な問題を起こしています。
子どもはもちろん大人も大好きなチョコレート。
このチョコレートの原料であるカカオの生産現場は、
世界経済の影響を受け、過酷な児童労働で成り立っているという現実があります。
わたしたちの身近にあふれている携帯電話やチョコレートから、
普段あまり伝えられないその製造過程などの裏側にある
様々な問題について知り、大量消費社会の中で
「わたしたちは、どうすればよいのか？」について考えます。

＜午前の部＞

「ケータイの一生　～ケータイを通して知る　私と世界のつながり～」

＜全体＞

開発教育協会会員（埼玉県立高校家庭科教員）の吉田里織さん進行のもと、携帯電話の製造現場、タイでの日系企業女性労働者問題を取りあげ、参加者が各テーブルでこの問題の６人の関係者になりきり、ロールプレイを行う。自分と違う立場の人を演じ、さまざまな立場や考え方にふれることで、携帯電話の裏側にある問題や、そこに自分たちがどう関わっているのかを知り、私たちに何ができるのかを考える。

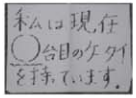
【ワークその１：私たちにとってケータイとは？】

参加者に携帯電話を今までに何台買い換えたかを問いかけ、自分たちにとってケータイとはどんな存在であるかを考えていく。

＜吉田里織さん●プロフィール＞
（特活）開発教育協会会員（埼玉県立高校家庭科教員）
大学の卒業研究をきっかけに開発教育に関心を持ち、「開発教育協会」のボランテイアメンバーとして参加するようになる。現在は時事問題とメディアリテラシーをテーマとしたグループで活動中。同協会では『たずねてみよう！カレーの世界』、『パーム油のはなし』、『ケータイの一生』の教材作成にかかわり、また最近では『ケータイの裏側』（コモンズ）を出版した。学校の授業では、開発教育的視点・手法を取り入れながら「食とグローバリゼーション」、「ホームレス問題」、「難民問題」、「人間の性と生」などのテーマにも取り組んでいる。いのちや教育をホリスティックに捉えることに惹かれ、農業、漢方、アロマテラピー等も勉強中。

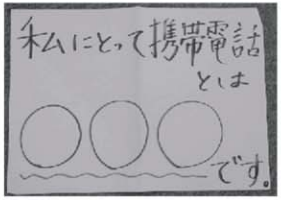
1）「ケータイは何台目？」

今回のワークショップの参加者は大学生から社会人まで、様々な人が対象であったため、携帯電話のこれまでの買い換えの数は０台から７年で６台買い換える人まで幅広い数だった。

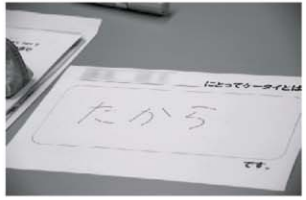


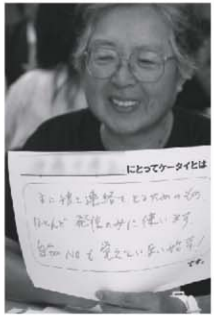
2）「私にとってケータイとは○○です」

紙に、自分にとってケータイとは何かを書く。答えとしてはケータイを良いものとして見る見方と悪いものとして見る見方があり、比較的若い人は好意的受け止めている。また、「無いと不安だけど、あると不安」「便利なものだけど、縛られるのは嫌」というどちらとも言える答えが特徴的だった。



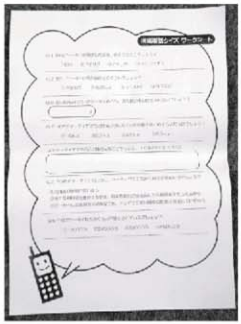
○連絡道具　○飾り　○暇つぶしの道具　○宝
○生活行動を常に見張られるもの
○取りあえず外に持って出るもの
○コミュニケーションツール＆娯楽
○便利なものだけど、縛られるのは嫌。
○存在を知らせるもの　○娘との連絡手段
○むつかしいもの　○ほとんど発信のみに使うもの
○無ければ無いで済むもの
○無いと不安だけど、あると不安





【ワークその2：ケータイについて知る／クイズ】

各グループで携帯の重さや機能に関するケータイクイズの答えを考えることによって、携帯電話がなぜこんなに普及してきたかを探っていく。



＜Ｑ１.＞　最初にケータイが登場した国は、次のうちどこでしょう？
①日本　②イギリス　③アメリカ　④スウェーデン
＜Ａ１.＞　③アメリカ
1946年に自動車電話（オペレーターを介して通話）として開発。オードリー　ヘプバーン主演映画「麗しのサブリナ」に登場。

＜Ｑ２.＞　現在、日本でのケータイの契約数はどのくらいでしょう？
①2300万　②5200万　③6100万　④9500万
＜Ａ２.＞　④9500万（2008年７月末データでは104,039,000台）
※③6100万は固定電話の数で、2000年度に固定電話を携帯電話が抜かし、現在人口の７５％以上の普及率となっている。

＜Ｑ３.＞　現在販売されているケータイのうち、最も軽いものはどのくらいでしょう？
＜Ａ３.＞　約100ｇ（卵２コ分）＝ **軽量になった**

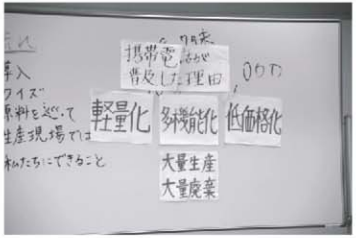
＜Ｑ３′＞　初めてケータイが持ち出せるようになった時の重さはどのくらいだったでしょう？
①1.0ｋｇ　②2.0ｋｇ　③2.5ｋｇ　④3.0ｋｇ
＜Ａ３′＞　④3.0ｋｇ（肩からかけて持っていた／1985年）
※日本は1985年にドコモが開発。
（写真／ショルダーホン）

＜Q4.＞　ケータイにできることはどんなことでしょう。（できるだけたくさん）
＜A4.＞　メール／インターネット／カメラ／テレビ／小説／音楽／おさいふ携帯／アラーム＝ **多機能になった**

＜Q5.＞　「0円のケータイ」のように、ケータイがとても安く買える理由は何でしょう？
①利用者が非常に多いから
②新たな利用者を獲得する都度、販売代理店が通信会社から報奨金をもらえるから
③ケータイの部品製造や組み立てを、アジアなど安い賃金の地域で製造しているから
＜A5.＞　①　②　③　すべて
（②について：販売代理店が一台販売で通信会社から約4万円報奨金があった。現在は契約台数が増えたため、また、報奨金がなくなったため携帯端末料は高くなり、それに反して通話料が安くなっている）
※当初の携帯電話の価格は20万で通話料が3～4万だったという。＝ **低価格になった**

＜Q6.＞　年間でケータイはどのくらい不要とされているでしょう？
①1500万台　②2700万台　③3200万台　④4500万台
＜A6.＞　④4500万台（一日10万台以上が廃棄されている）
＝ **大量に生産され、廃棄されている**

［クイズから見えてくることとは・・・］
携帯電話が普及した理由が見えてくる。そこには携帯電話の●軽量化　●多機能化　●低価格化という3つの要因があることが浮かび上がってくる。このことによって大量生産・大量廃棄といった状況が生まれてきていることが分かる。



【ワークその3：ケータイの原料産地を知る】

携帯電話の重さは約100ｇ前後。この中に様々な機能が凝縮されている。携帯を解体した中味を見ると緻密な構造になっている。携帯電話は約700個の電子部品で作られ、そのほとんどが世界各地で産出されている原料がつまっているという。携帯が大量生産、大量廃棄されている一方で、原料の生産地ではどんな問題が起きているのかを探る。

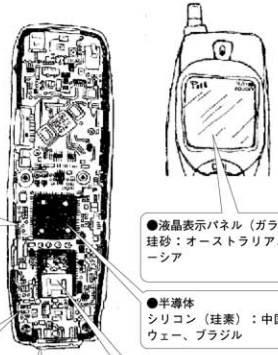
1）コンゴの子どもと携帯電話の関係？

コンゴと携帯電話の関係、つまりは日本で携帯を使用する私たちとアフリカのコンゴとの間にどんなつながりがあるかを、まずは新聞記事の子どもの写真から想像する。

▶　コンゴ民主共和国東部のカニオラ村が襲撃され、就寝中、全身をめった刺しにされた10歳の男の子。日本の本州ほどの広さのコンゴ東部は、金、ダイヤモンド、コバルト、スズなど、鉱物資源の宝庫として知られる。だが、豊かな資源は平和と繁栄ではなく、武装勢力が群雄割拠する秩序の崩壊をもたらした。人間の欲望にかき乱され混乱を極めるコンゴ東部に入った。（毎日新聞より抜粋　2005.11.14）

［ケータイの分解図（原料と主な産地）］

プラスチックケースを開けると、プリント基板と呼ばれる緑色の板が入っており、その上に半導体、コンデンサー、抵抗器、インダクターなど微小な電子部品がぎっしりと搭載されている。ケータイ１台あたりの電子部品の数は、約700個。（出典：『地球買いモノ白書』（コモンズ））



●プリント基板
金：南アフリカ、オーストラリア、アメリカ合衆国
銀：ペルー、中国、メキシコ
銅：チリ、アメリカ、インドネシア
鉛：中国、オーストラリア、アメリカ
パラジウム（白金族の元素）：ロシア、南アフリカ

●コンデンサー（セラミックコンデンサー、タンタルコンデンサー）
チタン鉱石（イルメナイト）：オーストラリア、南アフリカ、カナダ
アルミニウム：中国、ロシア
タンタル：オーストラリア、ブラジル、ルワンダ、コンゴ民主共和国

●プラスチックケース
石油：中東

●バッテリー（充電池）（リチウムイオン電池）
コバルト：コンゴ民主共和国、ザンビア、オーストラリア
炭酸リチウム：チリ

●半導体
シリコン（珪素）：中国、ノルウェー、ブラジル

●液晶表示パネル（ガラス）
珪砂：オーストラリア、マレーシア

2）コンゴと携帯電話の関係？　［ビデオ上映から］

携帯電話は約700個の電子部品で作られ、そのほとんどの原料が海外から輸入されている。その中の一つ、コンデンサーの原料となるタンタル（＝原子番号73）に目を向けてみる。

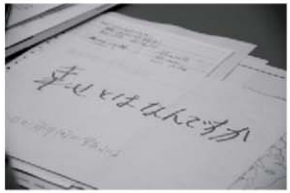
タンタルは地球上にわずかしかない希少金属であり、埋蔵量の６割がアフリカのコンゴ民主共和国にあるとされている。ＩＴ機器と携帯電話の普及で先進国の需要が増え、ＩＴ機器の小型化を支えきた物質がタンタルなのだ。携帯電話においても超小型コンデンサーを作るのに欠かせない原料となっている。こうしたタンタルの鉱山はコンゴの反政府勢力が支配している地域に多くあり、内戦は次第に政府軍との間での鉱山の支配権の争いとなっていく。鉱山地域を支配する反政府組織はタンタルの輸出で得た利益を先進国から流れ込む武器の購入に当てる。そのことは内戦が長引く一因となった。

［鉱山資源タンタルがなぜ重要なのか・・・］

軽くコンパクト化を求める我々には 軽量化の要である原料。アルミニウムだと60倍の重さになる。

3）新聞記事から改めて携帯の裏側を覗く

ケータイがあると便利だが、このケータイの裏側には戦争で争っている人たちがいることを知り、改めて痛々しいコンゴの子どもの写真が掲載されていた新聞記事を読み、各自感想を書く。



○豊かな資源が人間の欲（権力）のために一般的な素朴な人々の暮らし、命までも危機にさらしている。
○携帯電話によってたくさんの被害者を出している。
○オイルとかも同じかなあ。
○「命の代償」生きるため、基本的な概念
　「代償としての命」
○怖い！混乱！人間の欲望の犠牲になっている。
　人々が存在する「無知の恥」
○背景を知ること。ものを大切にすることは大切です。
　無駄にしていいもの、命なんてない！
○貧困な資源輸出国に武器を売る先進国が問題。
　何としても地球上から武器を消滅させないと！
○携帯が軽量化とかで普及しやすくなったことで今の小中高生が気軽に持てるようになったことで、さらに携帯を製造するためにタンタルという鉱物が必要となり、こうした事件が起き、たくさんの被害者を生んでいるという事実も理解して、携帯の扱い方を見直していきたい。

【ワークその4：製造現場での問題を知る】

ケータイが普及した要因の一つである低価格化の背景には、部品をアジア地域で安い賃金で製造しているという状況がある。24時間365日稼働でき、人件費が日本の10～20分の1と大幅に低く、設備投資費用も安く、生産の調整が可能というのが理由である。こうした低価格化の裏側で起きている生産工場での問題を考えるために、ケータイの部品を製造しているタイの日系企業の工場で起きた裁判についてロールプレイを行い、当事者となってケータイの裏側を探る。

［ワークシート：タイ・A市　日系企業女性労働者問題］

【要旨】タイ北部のA市は、古都チェンマイから南へ車で1時間の距離にある。11世紀来の黄金色の寺院ワット・プラタート・ハリプンチャイには寝釈迦像が並び、歴史的な遺産が多い。

政府がその近くの農村地帯を開発してタイ北部工業団地をつくったのは、1985年のこと。現在立地する約90社の多くが日系企業である。3万人程の労働者の大半が、タイ東北部や北部からの若い女性で、1年目の賃金は月給4,700バーツ（約12,500円）。彼女たちの大部分が電子部品メーカーで働いている。

この工業団地内にある日系企業のA工場では、携帯電話に不可欠なセラミックコンデンサーという部品に使われる、酸化アルミニウム基板を製造し、他の日系企業などへ納入している。従業員は約500人である。

A工場で働くマオリーさん（30歳）は、型抜きされた酸化アルミニウムを検品し揃える係りだった。4年近く働いた後93年から頭痛や体のしびれ、むくみなど体調不良となり、入院・休職した。酸化アルミニウムは、アルミニウム肺などの肺病変を引き起こす。チェンマイの病院で化学中毒と診断され労災申請したが、認められず、翌94年4月に解雇されたため、訴訟を起こした。

この問題を解決するために、関係者による話し合いの場がもたれることになりました。会議の参加者は次のとおり。（6人の役割になる）

●シリワン（A市隣村の村長　男　51歳）

工場については私も一言言いたい。近年工業団地からの排水で、川の魚が死に、湿地の木が枯れてしまった。それに、工場からのゴミを勝手に捨てていくので、川の汚染・異臭の苦情も多くて大変困っている。住民にはぜん息や皮膚病が多い。また、工業団地ができてから、村の土地価格が下がり、子どもたちの教育環境も悪化している。どうにかして欲しいものだ。

●マオリー（日系企業の工場労働者　女　30歳）

工場では、24時間の交代勤務で働いていました。仕事の速さに応じて4つのグループに分けられ、支払いに差をつけられるので、病気でもなかなか休めないのです。最も速いグループは、病気になる人が多かったように思います。私の仲間は、ひどい頭痛とけいれんで入院し、93年9月に亡くなりました。彼女の他にも、日系の工場で働く同じ団地の女性が数名亡くなっています。これは、中毒が原因以外に考えられませ

●影山和夫（日系企業の工場幹部　男　43歳）

私たちは、日本の消費者に、より安く携帯電話を提供できるように日々努力をしています。今回の訴えについては、工場での仕事と病気との関係がはっきりしないので、対応するわけにはいきません。アルミのチリの量は基準値のはずですし、防護具も渡しているはずです。従業員は休まず、非常にまじめに働いてくれており、助かっています。一人一人の労働時間は、はっきりとは分かりませんが、一生懸命働けばそれだけ賃金がもらえるのだから、彼女たちもありがたいでしょう。私たちは、日本の消費者だけでなく、タイ経済にも、労働者にも貢献しているのです。

●シャワット（タイ政府の役人　男　36歳）

いまやタイ最大の輸出産業は、IT産業で、輸出入額の約4分の1を占めています。そのほとんどが先進国の下請けで、特に日本の企業が大部分を占めています。我が国が下請け工場の場所に選ばれているのは、賃金水準が日本の10～20分の1ほどですみ、他の東南アジア諸国と比べて、治安が良いことが理由です。工場による問題についての苦情は聞いていますが、一つの被害補償をすると、次から次へと同じような訴えが舞い込んでくるので、予算が追いつきません。もしも問題を大きくして、日本企業が撤退するようなことが起こったら、多数の失業者を生むことになります。そうなれば、タイ国全体の経済状況にも影響を及ぼすでしょう。タイの国民のためにも、この問題は大ごとにせず、少々の問題は我慢してもらいたいと思います。

●若井聡美（日本の携帯電話利用者　女　19歳）

私にとって携帯電話は生活の一部、無くてはならない存在です。友達と連絡を取りあうにも絶対必要だし、無いと不安です。今の機種は4台目。どんどん機能が良くなっていくのでCMやカタログをよくチェックしています。本体自体は安く売られているので、新しい機種に買い換えるのも手軽にできるのが嬉しいです。海外で作った方が安くできるのなら、これからもどんどんいろんな国で作って、もっと安く売って欲しいです。そうしたら、企業だってもうかるし、私たちだって嬉しい。安いのが一番です。

●リン（日系企業の工場の元労働者　女　30歳）

私たちの地域は農村地帯で、昔からほとんど変わらない暮らしをしていました。町のような豊かな暮らしをしたいと思っても、なかなか仕事がないなかで、日系企業の工場での仕事は貴重な収入源となりました。確かに仕事はつらいけれど、お金のためなら仕方ありません。ただ、長時間働いている時には、頭痛やめまいがすることもあり、時々皮膚炎になることもありました。防護具は支給されていましたが、作業効率が落ちるので、ほとんどの人が着用していませんでした。中には、眠気覚ましに覚醒剤を使用している人もいました。みんな働くのに必死なのです。工場を退職した後で、工場で知り合いになった仲間と一緒に団地の近くに小さな店を開いています。工場がなかったら今の仕事もなかったかもしれません。

［6人の役割になり、その人にとって携帯は何なのかを考える］

●マオリー／・病気の原因（命と引き換えに携帯は必要ではありません）

●シリワン／・公害が・・・。どうにかして欲しいもの。

●影山／・日本の消費者にもタイの労働者にもありがたいもの（自分が生活する糧）

●シャワット／・タイの輸出生産業に占める重要な産業として経済維持するのに静観はやむを得ない。
・タイ経済を支えるもの。

●リン／・お金のために必要なものだったけど、今は私たちを苦しめるもの。
●若井／・なくてはならないもの。

＜全体の意見として＞
●携帯の工場に対して好意的だった　人：　若井さん、シャアワットさん、影山さん
●困っている人：マオリーさん、シリワンさん
●中間：リンさん

＜総括＞

実は私達自身もリンさんなのかも知れません。便利な生活に慣れてしまい、今さら昭和30年代には戻れない。だけど、こういう事実を知ると「どうしようか」と揺れてしまう。いい悪いとかでは判断できない、グローバル化した中での複雑な問題なのです。自分の中でも葛藤があり、迷ったり悩んだりするような問題が、まさにこの携帯の問題なのです。

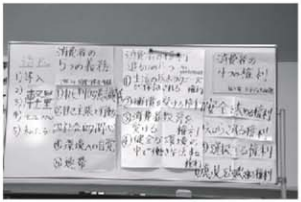
携帯電話の原料であるタンタルは軽くコンパクト化を求める我々消費者には 軽量化の要です。その裏側では内戦で300万人もの人々が命を落としています。その資源は、しばしば人々の暮らしを豊かにするのではなく逆に戦争を引き起こしています。その背景には資源を買う先進国の存在があるのです。現在社会で切り離せないケータイ。今後どうやって付き合っていったらいいのかを一人ひとりが考えていくことが大事なのです。

◀今回のワークショップは開発教育協会発行教材「ケータイの一生」を元に展開されました。この教材はケータイの生産、利用、廃棄に関わる10のワークから構成されており、原料を巡っての争奪戦、部品製造工場での労働問題、環境問題、そしてリサイクル問題等。手のひらサイズの小さな魂から、現代のグローバル化社会、大量消費社会が抱えている様々な問題が見えてきます。
http://www.dear.or.jp/book/book01_hp.html

【ワークその4：学んだことの整理】

ケータイの便利さとともに、様々な課題も見えてきた。これからケータイとどう付き合っていけばよいのかを考えるために、学んだことの整理をする。

個人の中でのキーワード（考えたこと、知ったこと、思っていること、発見したこと、疑問に思ったこと）を付箋紙３枚に書き、キーワードをグループで模造紙に貼る。その際、「生産者」に関する内容と、「私たち」に関する内容に分け、似たものは近くに貼る。



◀アメリカケネディ元大統領が提唱した「消費者の四つの権利」と、国際消費者機構が提唱した「八つの権利と五つの責任」
模造紙にまとめた問題がそれらの権利を満たしているか・いないか、解決のために消費者として何ができるのかを提示。

▲携帯電話の買い換えの時に古い携帯をリサイクルに出すことも私たちができることの一つ。

学んだことのキーワード（まとめ）

生産

●グローバル化の問題　●思いやりは大切
●どこかにしわよせが行くような経済構造
●どの立場でもお金が大事
●日本企業の社会的責任　●日本の公害技術
●便利さの裏のゆがみをなくしたい
●どうすれば途上国の人の環境を守れるのか
●もっと知りたい　●リサイクル
●利用者と生産国とのギャップ
●日本でもあった公害が外国でも起きている　●グローバル化の裏側も知る（知らせていく）ことの大切さ
●メディアの情報　●共存していく、する
●JFS策に反映させられることもあるはず　●レアメタルをめぐっての紛争の泥沼化
●コンゴではどうしてタンタルを利益として国民に返さないのか？
●知ること、伝えること、少しずつの行動だけで、ことは解決するのか

中間

●自分たちの知らない所での環境問題、破壊 ●100gに世界がつまる ●自分にできる事　●タンタル
●どの段階（生産、原料）でも、いつも弱い立場の人間（労働者、子ども）が被害を受ける　●経済とイノチ
●疑問、知らない現実を知るには何が必要なのか　●外国人労働者の辛さを理解することが大切
●便利な生活をしながらこれを考える。明日になったらまたこの生活が続く矛盾　●安い便利優先社会
●他者の立場、若井さんの立場にも立ってみる　●便利さの裏側で命をかけている人がいること
●ケータイで血が流れている　●ケータイをフェアトレードにのせればいくらの値がつくだろう
●ケータイは様々な「場」で人を変える（憎しみ、喜び）　●ケータイは自分一人のものじゃない

●携帯一つが実に多くの人々と関わり、多くの問題を抱えていることを実感した
●資源をめぐる戦争についてもっと報道されてもいい　●悲しい
●便利さを追求する裏に犠牲になる人たちが必ず出てくる　●困惑
●自分で情報を追いかけよう　●皆の立場でもっと考えて　●携帯は世界の産物
●時代の針は戻らない。どうする？　●便利さの裏側には貧しさがある
●みんなが幸せになれる解決方法を　●むつかしい問題
●人間の欲望
●携帯電話をめぐる世界情勢　●解決のためのアクションが必要
●携帯を使うことで解決できる方法は？　●人命　●生活の質
●どのように今日の学びや、現実の出来事を伝えていけるか？
拡げていけるか？

私たち

●世界とのつながり　●消費者の意識　●使うだけじゃない携帯
●便利さ、安さの追求を緩めてもいいのではないか　●貧困と格差
●考えたこと、目の前の便利さや安さだけを追求していいのか
●地球環境の破壊　●南北問題を再認識　●私と戦争とのつながり
●感じたこと　私たちの楽さの裏側に別の国の人たちの苦しさがある
●携帯の将来はどうなるのだろう　●多少不便でもよりよいくらし　●価値の転換（かっこいいんだ）
●やっぱり携帯はあってほしい　●便利さの追求って悪いこと？　●発展国を知る　●生活の見直し
●自分の携帯が世界とどのように繋がっているかを皆知るべきだ　●もったいない生活
●「知ることは大切」だとは思うが、それで解決したような気になってはいけないと思う。
●ケータイを持つときこのことを頭の片隅に　●聴く耳、伝える口　●必要ないもの
●このグローバル化された経済の中でこのことを考える無力感がある　●周りの人に事実を伝えていく
●物を大切にしなければならない　●買い換えるのはもう少し後にしよう　●人間の欲望を規制できるか
●便利なものに慣れすぎてしまっている。　●すぐに忘れてしまう自分の情けなさ
●自分の得だけを求めてはいけない　●どうしようもない経済構造・無力な一人一人の人間
●ケータイが体に及ぼす影響は？これだけ多くの人が使用しているのに問題はないのか？
●本当に何ができるの？　●携帯に無知な自分という存在　●知っているのと知らないのとでは大違い
●利便性を追求するだけでなく、世界の現状にも目を向けなければならない
●以前の生活に戻れない自分（周囲の動きに流されている自分）　●電話ができるだけで良い
●お気に入り（長く大切につかう）　●消費者として、現状の把握と知識のなさにがっかり…反省
●人間同志のコミュニケーションが大事になる　●身近なものと世界の問題がつながっている
●やっぱり脱ケータイするぞ！ ●やっぱり携帯はなくてもOK。生きていける
●人間の能力が低下する（読み書きそろばん）にいたる
●大量生産、大量廃棄は労働者にとっても、環境にとっても一面が多いと思うので、携帯というものに個性を生かして一人の人が持っている期間を長くできるようにしていくといい

＜午後の部＞

「おいしいチョコレートの真実 ～世界の働く子どもと私たちのつながりって？～」

＜全体＞

ＡＣＥ理事の白木朋子さん指導のもと、カカオを取り巻く６家族の暮らしや買い物から見えてくるもの、感じたこと気づいたことを話し合い、チョコレートの裏側にある児童労働問題の実態を知り、そこに自分たちがどう関わっているのか、そして私たちにはどんなアクションがおこせるのかを考える。

【ワークその１：チョコレートカカオ、アフリカについて知る＜クイズ＞】

クイズを通してチョコレート、カカオ、アフリカに関する基礎知識を学びます。

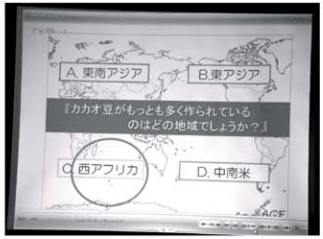
※「部屋の四隅」の手法を使う。部屋の４つの隅をそれぞれA、B、C、Dの回答スペースとする。答えだと思う部屋の隅に移動する。

＜白木朋子さん●プロフィール＞
（特活）ＡＣＥ　理事・事務局長
宮城県生まれ。
学生時代にインドを訪れ、児童労働を余儀なくされる子どもたちに出会う。1997年にはＡＣＥの立ち上げに参加。講演・執筆活動やキャンペーンの実施に携わる。2005年４月より現職。児童労働ネットワークの事務局、開発教育ワークショップやスタディツアーの実施などの啓発事業、国際協力事業の運営などを担当。

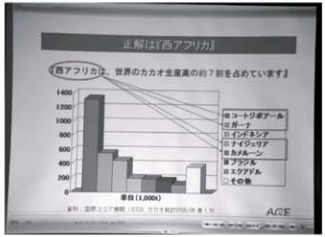
＜Ｑ１.＞日本人は、年間１人あたり何枚分の板チョコを食べるでしょうか？
Ａ．30枚　Ｂ．70枚　Ｃ．100枚　Ｄ．150枚

＜Ａ１.＞　A.30枚
（ミルクチョコレート1枚70ｇとして計算）
※日本の一人当たり消費量は19位だが、国別の消費量を見たら、世界第6位
※各国の1年間に食べる板チョコの枚数＞日本：31枚
アメリカ：76枚　スイス：154枚　ドイツ：159枚

＜Ｑ２.＞カカオ豆がもっとも多く作られているのはどの地域でしょうか？
A.南アジア　B.東アジア　C.西アフリカ　D.中南米



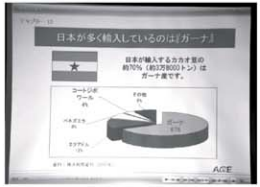
＜Ａ２.＞　C.西アフリカ



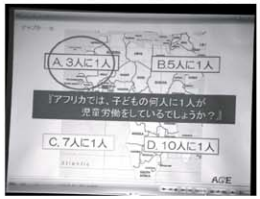
※西アフリカは、世界のカカオ生産高の約７割を占めている。

※生産地は赤道をはさむ南北緯度20度以内に限られている。

＜Ｑ３.＞　日本がもっとも多くカカオ豆を輸入している国はどこ？
A.コートジボワール　B.ガーナ　C.ブラジル
D.インドネシア
＜Ａ３.＞　B.ガーナ
※日本が輸入するカカオ豆の約70％（約３万8000トン）はガーナ産です



＜Ｑ４.＞　アフリカでは、子どもの何人に１人が児童労働をしているでしょうか？
Ａ．３人に１人　Ｂ．５人に１人　Ｃ．７人に１人
Ｄ．１０人に１人
＜Ａ４.＞　Ａ．３人に１人



※サハラ以南のアフリカでは、３人に１人の割合
世界には働かされている子どもが　約２億1800万人
＝　世界の子どもの７人に１人

＜Q5.＞　チョコレートの原料カカオの実はどれでしょう？
Ａ　Ｂ　Ｃ　Ｄ

＜A5.＞　D

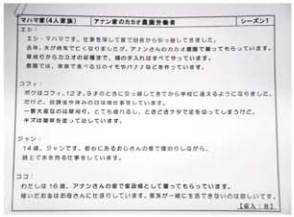
【ワークその2：ガーナと日本の6家族を体感＜グループワーク＞】

ガーナ（４家族）と日本の家族（２家族）を演じ、それぞれの家族の買い物を通して、カカオ農園の人々の暮らしから見えてくることを話し合う。

ルール１）＜シーズン１＞のシートから、各家族で役割を演じる。それぞれの人物にセルフがあり、役になりきってセリフをよみあげ、どんな家族かみんなで共有し合う。

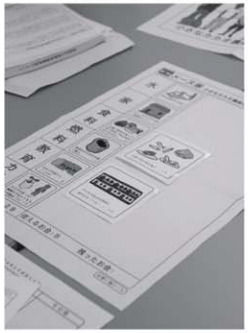
＜シーズン１による6家族の状況＞

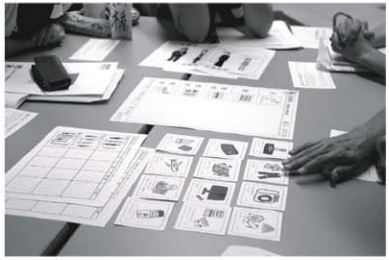
家族の名前	仕　　事	水、食事、子どもの教育	収入
マハマ家（４人家族）	アナン家のカカオ農園労働者	川から汲んできた水を使用 食事は自分で育てたイモのみ 子ども３人のうち１人だけ公立学校	8
アナン家（９人家族）	政府機関＋カカオ農園経営者	公共水道／　野菜や肉・魚を食べる ３人が公立学校、４人は海外へ留学中	200
メーヌ家（８人家族）	小さなカカオ農家 （組合に不参加）	共同の井戸 市場で野菜を買う（肉は特別なときのみ） ６人が公立学校	37
ヤボエ家（５人家族）	小さなカカオ農家 （組合に参加）	共同の井戸 市場で野菜を買う（肉は特別なときのみ） ３人が公立学校	43
佐藤家（４人家族）	上野製菓の工場長	水道／スーパーで買い物 公立学校の授業料（２人分）・給食費	230
高橋家（４人家族）	上野製菓の営業部長	水道／スーパーで買い物 公立学校の授業料と塾（２人分）・給食費	350



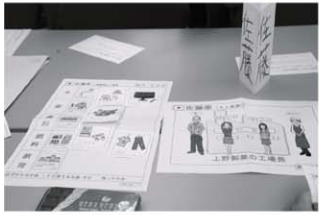
▲セリフが書かれたシート

ルール２）各家族で収入に応じた買い物をする。





▲お買いものできるモノやサービスのカードを使い「使える お金」を使って、家族に必要なモノやサービスを買い物し、お買い物シートの右側の空いているスペースに置く。



◀「お買い物シート」シートの左側に生活のために必要なモノやサービスが並んでいる。これは「必ずかかるお金」としてシート左下に合計した金額が書かれている。この家族（佐藤家）の場合は150。右に書かれているのが使える お金の金額。佐藤家の場合 80となる。

ルール３）お互いの家族とその違いを理解する。

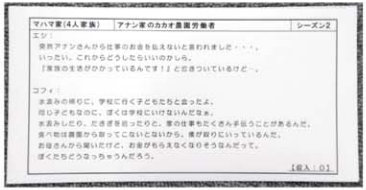
①一つの家族が２班に分かれ、一つのチームは他の家族を見学しに行き、もう一つのチームは見学しに来た他の家族に自分の家族について説明する。

②見学するチームは、家族同士の生活の違い（主に水、食料、教育）、収入、使えるお金、お買い物したものなどについて質問し、メモシートに記録する。
③全ての家族を見学し終わったら、説明チームと交代する。

ルール４）＜シーズン２＞のシートから、
カカオ豆価格の変化による各家族のへの影響を知る。
シーズン２のセリフカードを読んで、カカオ豆の価格の変化が、自分の家族の収入や生活にどのような影響を受けたかを確認し、さらに、他の家族と情報を共有するために、家族毎にシーズン２のセリフカード読み上げる。

＜シーズン２＞の世界の状況

カカオ豆の１シーズンが終わり、次の収穫がやってきた。次のシーズンは、良い天気に恵まれ、世界中でカカオ豆の収穫が増えたため、カカオ豆の世界価格は急落。これにともない、ガーナ政府はカカオの生産者価格を切り下げた。各家族はどのような影響を受けるか。


マハマ家（4人家族）　アナン家のカカオ農園労働者　シーズン2

エシ：
突然アナンさんからお手のお金を払えないと言われました・・・。
いったい、これからどうしたらいいのから。
「家族の生活がかかっているんです！！」と泣きついているけど・・。

コフィ：
水あみの帰りに、学校に行く子どもたちと会ったよ。
同じ子どもなのに、ぼくは学校にいけないんだよ。
水あみしたり、たきぎを拾ったりと、家の仕事もたくさん手伝うことがあるんだ。
食べ物は農園から取ってこないとないから。僕が取りにいっているんだ。
お母さんから聞いたけど、お金がもらえなくなりそうなんだって。
ぼくたちどうなっちゃうんだろう。

【収入：0】

＜シーズン２による6家族の変化＞
ルール５）シーズン２の結果を聞いて気づいたこと、ゲーム全体を通して感じたことを発表

家　族	シーズン２の変化	収入
マハマ家	マハマさんの奥さんはアナンさんの農園で働いていたが急に辞めさせられた。唯一学校に通っていたコフィ君が学校に通えなくなってしまった。	8 →　0
アナン家	カカオの価格が下がって生活が苦しくなったため、やむをえなくマハマさんに辞めてもらった。留学している子どもの学費だけはなんとかしたい。	200 → 130
メーヌ家	収入が減ったため、やっと進級した子どもが学校に通えなくなるかも知れない。ヤボエさんの家では大きな影響がないことを聞いて、組合に入らなかったことを後悔している。	37 →　28
ヤボエ家	収入は減ったが組合に入っていたので、ボーナスで何とか生活していけそう。子どもも学校に通っている。（安心している表情）	43 →　40
佐藤家	ガーナは全ての家族で収入が減ってしまったが、日本では、カカオ豆の価格が下がって安く仕入れることができたので、会社の売上げが上がり、収入が上がった。しかし、ガーナの児童労働が問題になりはじめ、喜んではいられない様子。	230 → 240
高橋家		300 → 320

ゲーム全体を通して感じたことを発表

＜感じたこと、気づいたこと＞
・同じガーナでも家族によって格差が大きい
・広い農地を持っていても組合に入っていないと収入が少ない
・途上国は貧しい国ではなく、格差が大きい国
・経済的に苦しくても、生活を楽しんでいる
・生産国の家族にフェアトレードの影響がなかった
・悲しかった。日本はなんてお金持ち！
・組合費が高くて組合に入れないという現実があるのでは。
・家業を子どもが手伝うのは児童労働なの？

【ワークその3：カカオ産業の児童労働の現状を映像から理解する（DVD上映）】
カカオ生産地域の児童労働の貧困の背景には、カカオ貿易や価格決定の仕組み、植民地の歴史が影響していることや、カカオ産業の児童労働に対して行われている取り組みについて理解し、チョコレートを消費している日本の私たちにも取り組めることがあるのかを考える。

＜上映内容＞
「おいしいチョコレートの真実」

●ガーナの生活
日本のNGOエースのスタッフがガーナのある村へ訪ねて、人々の暮らしやカカオ作りの様子を見せてもらう。朝５時半に子どもたちは起きて、井戸から一日に使う分の水をくみ上げた後、朝食の準備。朝食を終えると学校へ30分から１時間かけて登校。学校の環境は整ってはいない。授業料は無料だが、制服や文房具などはそれぞれの家庭で負担しなければならない。なかには制服やノート、筆記用具も持っていない子もいる。

●カカオづくり
カカオ農園での仕事は実の収穫や実を割ってカカオの果実と種を取り出す作業、豆を発酵させる作業、発酵させた豆を農園から家まで運び乾燥させ、乾燥させた豆を販売する作業まで、家族全員で助け合いながら、長い時間と手間をかけているが、こうしたカカオ豆を作ってい

る人たちは、自分たちの作ったカカオ豆がチョコレートになったことを見ることも食べることもない。ましてやそのチョコレートを日本の子どもたちが食べていることも知らない。そして現在、重い荷物を運ぶ作業は、発育途中にある子どもたちにとって、特に負担が大きいことや、ナタを使っての薪割りや草刈り、農薬散布など、危険を伴う作業があること等から、カカオ作りの作業に子どもたちが関わっていることに国際的に大きな問題になっている。

●児童労働の背景

カカオ農園でどんなに働いても貧困から抜けられないことが、子どもの労働につながる。こうした状況には、カカオの価格を決める仕組みが深く関係している。カカオの国際価格はロンドンとニューヨークの商品先物市場で決められ、お金儲けを目的とした投資や取引に利用されることもある。カカオ価格は生産者の声が届かないところで決められ、さらに価格の変動が激しいために、生産者は生活に大きな影響を受ける。現在の先進国はかつて植民地支配していた国々で、原材料となる特定の換金作物を大量に安く作らせ、その貿易で多くの利益をあげている。植民地支配の歴史が現代にも大きく影響している。

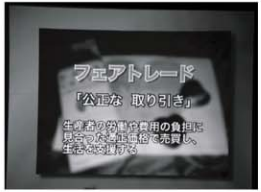
▲チョコレートの原料となるカカオ豆は、農家の人たちの多くの手作業によって大切に育てられ、たくさんの過程を経て、私たちの手元に届けられる。カカオ豆がチョコレートに生まれ変わるまでには、たくさんの人たちが関わっていることがわかる。

●さまざまな取り組み

2001年カカオ農園での児童労働の様子が欧米のニュースや雑誌での報道を受けて、児童労働をなくすために様々な動きが起こった。アメリカの議員がチョコレート会社に働きかけて、児童労働をなくすための取り決めを作り、ガーナ政府は児童労働がないカカオ生産の実現として、学校を作って、子どもたちが通学させることを政策の一つに掲げたが、学校の設備はまだ十分ではない。また、体を痛めるなどして、学校に行けなくなる子どもも多い。

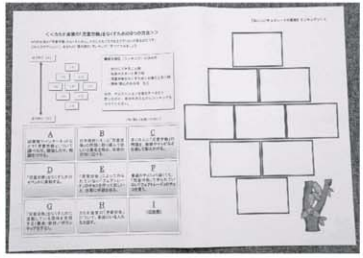
◀「チョコレートを消費する人たちはまともな値段でカカオを買って欲しい。そうしなければカカオ農家は生活できない」と話す農家の人。

日本でも児童労働をなくそうという活動が行われている。カカオを消費する立場の私たちにできることとして、日本のNGOエースの取り組みでは、まず、きちんと実態を理解するためにガーナでの調査活動を行い、フェアトレード（生産者の労働や費用の負担に見合った適正価格で売買することで、途上国の生活を支援するもの）のカカオを原料に使ったチョコレートを買うようにすすめている。バレンタインデーに合わせてこの問題を伝えるキャンペーン活動や、ミニストップと協力してフェアトレードカカオを使ったソフトクリームの開発などにも取り組んできた。このように世界各地で様々な活動が行われているが、その取り組みは問題全体を解決するには至ってない。児童労働の解決には国や企業、そして消費者である私たちを含む、関係するすべての人々が協力して取り組むことが必要。



【ワークその4：カカオの児童労働をなくすためにできる私たちのアクションとは？】

ランキングシートを参考に右ページの-９つのマス（空欄）に、下記のA～Iのアクションに優先順位をつける。個人で作業したランキング結果をグループ内で発表して意見交換する。その後、グループでどんなことを話し合ったかを全体で共有する。



［ランキングシートA～Ｉの内容］

A.図書館やインターネットなどで「児童労働」について調べたり、勉強したり、知識をつける。

B.日本政府にもっと「児童労働」の問題に取り組んで欲しいと署名を集め、その声を日本政府に届ける。

C.多くの人に「児童労働」の問題を、新聞やテレビなどを通して訴えかける。

D.「児童労働」をなくすためにイベントに参加する。

E.「児童労働」によってつくられていない「フェアトレード」のチョコレートを作って欲しいと、企業に手紙を送る。

F.普通のチョコより高くても、「児童労働」で作られていない「フェアトレード」のチョコを買う。
G.「児童労働」をなくすために活動している団体を支援する（募金・寄付／ボランティアをする）
H.カカオ産業の、「児童労働」について、身近にいる人たちと話す。
I.（自由欄）

＜「私たちができるアクション」の各グループ意見交換内容＞

★個人的な意見になりますが、私は［C］を一番上に上げました。　しかし、実際にすぐできることで は［H］ではないかなという話が出てきました。現実問題として子どもの児童労働をなくした場合に本当にチョコレートの価格が上がってくるのかなあと。そういうことが疑問として出てきました。

★［H］が自分にとってできることであるのと、あと一つは［I］の自由欄です。児童労働を止めさせることでチョコレートの値段を少しずつ上げる。児童労働がなくなれば、その分の賃金がそれぞれの家族になくなるので困るのではないかという話も出てきました。チョコレート１個に対して「搾取税」というか、本当に困っている人にダイレクトにいくような税金を国際法で作って、金額の１%、100円であれば１円はカカオ栽培の人たちに行くようにすれば、みんな納得してその税も払うのではないかと話し合いました。午前中にありました携帯電話についても同じようすればいいのではないでしょうか。

★優先順位の付け方で自分にできること順にするか、効果が大きい順にするかという話し合いがありました。私は自分のできること順にしました。９番目の自由欄には、不買運動と書きました。過去の事例とかで、児童労働を使っている商品を買わないことで、企業にとっては企業イメージとしてもダメージを受けるのではないかと思います。もちろんそのことで児童労働をせざるを得ない家族はその間仕事がなくなって大変になるのではないかという問題もあり、不買運動のいい面と悪い面ということで協議もしました。フェアトレード商品も昔に比べれば増えてきましたが、やはり日本でも低賃金の労働者の家庭ではそんなフェアトレードの商品は買えない。やっぱり少しでも安いものを買うしかない。それは日本で作られているものでも同じです。ですから、「安くていい」というふうにしていたら何も変わらないということを話し合いました。

★私のグループでは［A］の「ちゃんと勉強して知識をつけたい」という人が多く、農家では子どもが働くのが普通だと思うのです。どれぐれくらい働いていたら児童労働になるのか、という児童労働の定義についてもしっかり知りたいと思いました。自分のできることの順位として、フェアトレードチョコレートを買うというのを上の方に上げた人も多かったです。でも、フェアトレードチョコレートを買いたいと思っても、スーパーにもコンビニにも置いていないない。私は自由欄に、まず近くのスーパーやコンビニで、フェアトレードチョコレートを置いてください。というのをあげました。全てがフェアトレードチョコレートになったら確かに低賃金の人がチョコレートを食べられなくなるということが出てくるかもしれないので、いろんな選択肢ができるということが必要かなと思います。店頭に普通のチョコレートもあるし、フェアトレードチョコもある。普通に買いに来た人が自分の意志でそれを選ぶことができる、そういうふうになれば少しずつ変わっていくのではないかという気がします。

★勤め先で実際チョコレートを製造販売しているものですが、原材料のカカオがどういう形で入ってきているかという実態がわからないので、まず会社にそれをきちんと確認してもらい、　できるだけそういう児童労働にかかわっていない原材料に替　えてもらうというのが一番の最優先でやるべきことだと思い　ました。あとは、大手さんには当然働きかけるべきだと思い　ます。今の企業は非常にイメージを気にしますので、効果が　あると思います。

＜講師の白木朋子さんによるまとめ＞

今発言していただいた通り、本当にいろいろな取り組みが必要です。企業の場合は、原材料が児童労働のものでないかどうかをまず調べるところからしていただきたいです。どこのメーカーさんも誰がどういうところで作っているかまでは把握していません。それはチョコレートだけではなくて、いろいろなものに関して同じことだと思います。まずそれを把握するというのが大事だと思います。＜「私たちができるアクション」中で、［B］の政府に対して署名を集めるというのは、あまり効果がないのではないかと言われることが多いですが、私たちも今年の５月から６月にかけて、６月１２日の児童労働反対世界デーに合わせ、同じような団体がネットワークを組んで、働く子どもに教育をということで、１万人署名キャンペーンを行いました。インターネットとハガキで１万２千人分の署名が集まり、外務省に届けました。日本は教育支援というのをＯＤＡの中で重視していますが、それが児童労働をなくすということにはつながっていません。ですから、児童労働がなくなり、子どもたちがちゃんと教育を受けられるようにということを強化してほ

▲白木さんも執筆に加わった児童労働を考える本「わたし8歳、カカオ畑で働き続けて」。児童労働を考えるＮＧＯ＝ＡＣＥが執筆。

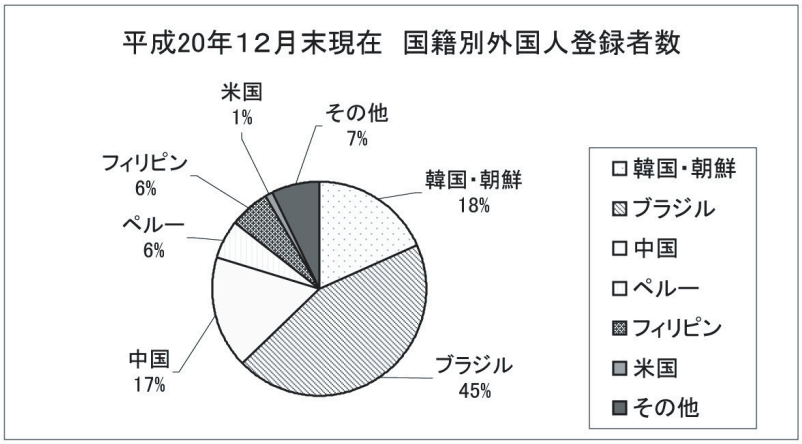
しいと政府に働きかけています。最近では、マスコミの注目度というのが上がってきています。フジテレビの「世界が１００人の村だったら」とか、それに続いていろんな局が番組に取り上げたり、新聞記事に取り上げてもらったりしています。マスコミが報道することで、より多くの人たちに理解していただける。まず知ってもらうこと。そこからでないと企業を動かすための働きかけは起きてきません。

今回のこのワークショップは、知って考えて行動するというのがキーワードになっています。やはり、最後の行動するというところが一番難しいですね。ワークショップをして、児童労働の問題を知り、考え、その場では理解はしますが、その後、どうしていいか分からない。みなさんは多分、自分に出来ることを基準にして選んでいただいた方もたくさんいると思いますが、この中に必ず、今すぐできることがある筈です。先ほど、「製菓会社に勤めているので、まずは原材料を調査する」ということを言っていただきましたが、是非、このワークショップが終わったあと、「アクション」に向けて行動を起こしていただけたらと思います。私たちエースは児童労働の問題を解決していくために、実際に海外で子どもたちを支援する活動を行っているのと同時に、こういった日本の国内で一般の市民の人たちに啓発したり、あとは企業とか政府に働きかけるということを通じて、様々な角度から児童労働をなくしていくために取り組んでいる団体です。そういった団体を支えるというのも一つのアクションになると思うので、ぜひ協力していただけたらと思います。

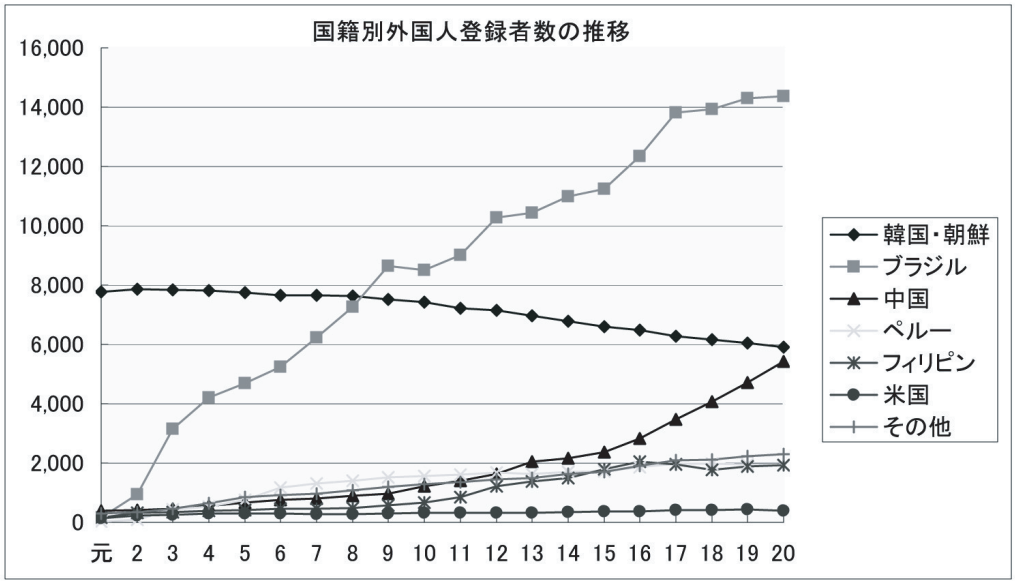
ACE（エース）では、このワークショップを実施するための教材セットを販売しています（DVDつき、6,800円）。また、ワークショップ講師の派遣も行っています。詳しくは、http://acejapan.orgをご覧ください。

滋賀県における外国人登録者数

財団法人滋賀県国際協会　作成



国　籍	登録者数
韓国・朝鮮	5,898 人
ブラジル	14,379 人
中国	5,416 人
ペルー	1,912 人
フィリピン	1,939 人
米国	392 人
その他	2,296 人
合計	32,232 人



外国人登録者数の比率が2%以上の市町村　*（平成20年12月末現在）*

	市町村名	外国人登録者数	総人口	外国人比率	備考（上位3国籍）
1	湖南市	3,340	56,403	5.92	ﾌﾞﾗｼﾞﾙ2,076人、韓国・朝鮮388人、ﾍﾟﾙｰ365人
2	愛荘町	1,133	20,580	5.51	ﾌﾞﾗｼﾞﾙ741人、中国154人、フィリピン79人
3	長浜市	4,343	85,269	5.09	ﾌﾞﾗｼﾞﾙ3,027人、ﾍﾟﾙｰ372人、中国348人
4	東近江市	4,270	118,768	3.60	ﾌﾞﾗｼﾞﾙ2,750人，中国467人、フィリピン327人
5	甲賀市	3,243	95,919	3.38	ﾌﾞﾗｼﾞﾙ1,717人、中国481人、ﾍﾟﾙｰ350人
6	安土町	395	12,550	3.15	ﾌﾞﾗｼﾞﾙ277人、韓国・朝鮮42人、中国24人
7	虎姫町	144	5,792	2.49	ﾌﾞﾗｼﾞﾙ91人、中国　26人、ボリヴィア9人
8	彦根市	2,446	111,782	2.19	ﾌﾞﾗｼﾞﾙ753人、中国664人、フィリピン377人
9	栗東市	1,356	64,735	2.10	ﾌﾞﾗｼﾞﾙ471人、韓国・朝鮮269人、中国256人、
	県全体	32,232	1,415,027	2.28	

※滋賀県商工観光労働部国際課の調査に基づく。
※県民44人(43.9人)に1人が外国人　　（H20年12月末現在の統計から）

「国際教育研究会 Glocal net Shiga（ぐろーかる ねっと しが）」について

私たち、「国際教育研究会 **Glocal net Shiga**（ぐろーかる ねっと しが）」は平成15年（2003年）4月に立ち上がったグループです。名前にある **"Glocal"** とは Global＋Local を結びつけた造語です。**"Think Globally, Act Locally"**（地球規模で考え、地域から行動する）という開発教育／地球市民教育／グローバル教育の地域社会に対する考え方を現すことばがあり、地球と地域を結ぶことばとして生まれました。

このような考え方をうけ、地元滋賀（Shiga）で地域に根ざした人たちをつなぎ（Network）、みんなで一緒に地球市民を育む活動に取り組んでいきたいという思いが込められています。

会のねらいについて

- ○ 地球上には、自国文化を含め、さまざまな生活・文化等があることを知り、多様性を受け入れること **多様性の尊重**
- ○ 地域には、さまざまな文化背景や価値観等をもつ人びとがともに暮らしていることを認識し、多文化共生の意識を育むこと **多文化共生社会づくり**
- ○ 世界と自分はつながっていること、自分たちの生活と地球のどこかで起こっている問題が密接につながっていることを理解すること **相互依存関係の理解**
- ○ 地球的課題を解決するために行動すること **公正・平和な社会づくり**

など

こうしたことをねらいとして、さまざまな実践方法（おもに参加型学習法）を学びながら、国際教育を促進することを目的としています。教育関係者・国際協力NGO関係者・外国籍住民・地域国際協会関係者、学生、青年海外協力隊OVなど、さまざまな立場や経歴の持ち主が参加しています。これまでに滋賀県の特色を生かした題材をとらえ、「ブラジルボックス」・「カルタ"わたしん家（ち）の食事から"」などの教材を開発してきました。また、より多くの方に国際教育を体験していただくよう年数回、国際教育ワークショップを開催しております。今後も幅広い知識や情報の交換を行い、より深みのある内容を取り上げていきたいと考えています。

入会について

毎月１回日曜日に例会を開催しています。さまざまな経歴のメンバーが集まるクラブ活動のような会です。渡航経験や語学については、まったく心配していただく必要はありませんので、この研究会にご関心のある方は、お気軽に下記までお問い合わせください。

国際教育・開発教育についての企画相談、講師派遣も随時承ります。

＜お問合せ先＞

財団法人滋賀県国際協会 担当 大森

〒520-0801 滋賀県大津市におの浜1-1-20 ピアザ淡海２階

電話：077－526－0931 ﾌｧｯｸｽ：077－510－0601

E-mail：omori@s-i-a.or.jp

研究会20年度の活動について

開催日	内　　容
4／20	滋賀県国際協会主催国際教育ワークショップのテーマについて話し合い 滋賀県総合教育センター「10年経験者研修」についての話し合い、新教材づくり
5／25	滋賀県総合教育センター「10年経験者研修」についての話し合い、研修の流れについて 新教材づくり、「国際理解研究会　みなみの風」代表の林　良昭さんとの情報交換
6／15	滋賀県総合教育センター「初任者研修」についての話し合い、研修の流れについて
6／19	滋賀県総合教育センター「10年経験者研修」にて「多文化保育フォトランゲージ」、「世界がもし100人の村だったら＜CO_2排出量について＞」、「ビン君に何が起きたのか？」等を紹介
7／27	「10年経験者研修」報告 新教材づくり
8／16	国際教育ワークショップ「地球市民を地域とともに育てようpart７」参加 ケータイとチョコができるまで～大量消費社会の裏側をのぞいてみよう～ ファシリテーター：　吉田　里織さん、白木　朋子さん、大槻　一彦さん
9／14	ブラジル使節団参加者報告 新教材づくり、デモンストレーションについて話し合い
10／19	「ブラジルボックス」追加アイテムについて 新教材づくり
11／15	新教材の名称について話し合い「非識字体験ゲーム　ここは何色？」に決定 「多文化子ども広場」でのデモンストレーションについて話し合い
11／16	滋賀県子ども・青少年局事業　きらり☆NPO・ボランティア活動フェアにて　活動紹介
12／ 7	「多文化子ども広場」において新教材デモンストレーション実施
1／17	新教材デモンストレーションのふりかえり 新教材アクティビティー　レベル２のアイデア出し、次年度滋賀県総合教育センター研修について 滋賀県国際協会主催国際理解講座への協力について
2／ 1	滋賀県子ども・青少年局事業　「マッチンぐぅ！パーティー」において団体活動紹介
2／ 7	滋賀県国際協会主催国際理解講座 「ＣＯ２の排出って…？世界がもし100人の村だったら＜環境編＞」の実施
2／22	新教材アクティビティー　レベル２案のデモンストレーション体験
3／15	新教材アクティビティー　レベル２づくり　　次年度の活動について 映画「ブラジルから来たおじいちゃん」栗原監督と意見交換

「非識字体験ゲーム　ここは、何色?」デモンストレーション

映画「ブラジルから来たおじいちゃん」栗原監督を迎えて

新教材　「非識字体験ゲーム　ここは、何色？」開発中です

国際教育研究会　Glocal net Shiga

私たちは今、新しい教材を作っています。今回の教材作りのきっかけは、日本社会に暮らす外国籍の子どもたちが日ごろ感じている言葉や言語の不自由さ（非識字）を日本の子どもたちにも感じてもらいたい、外国籍の子どもたちには、異なる言語であっても言葉がわかることの素晴らしさに気づいてもらいたいという２つの思いからです。

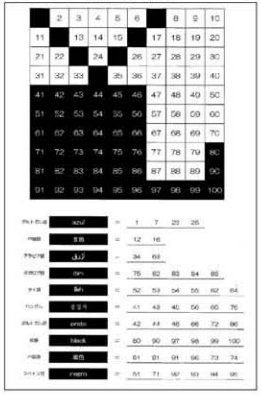
まず議論の中で、身近な文房具を多言語で表記し、それを探し出すアクティビティ（活動）を考えました。グループの中にはそれぞれ探したいモノに関わる情報を持った人がいて、その人から情報を聞き出しながら、最終的に自分が探しているモノを探し出すというアクティビティです。グループ内で情報を共有したり、教え合ったりする場面はコミュニケーションが図られ、探しモノが見つかったときの達成感も大きく、非常に盛り上がるアクティビティとなりました。

しかし、「非識字体験」というよりは、「情報収集・課題解決型ゲーム」の要素が強く、もっと「字が読めない」「わからない」といった不自由さを感じさせたいという意見も出ました。

次に、字が読めないことで作業ができない、先に進めないという要素をアクティビティに加えようということになりました。ここで出されたのが、色を多言語で表記し、それぞれの言葉の意味を調べなければ、絵が完成しないというアクティビティ（「非識字体験ゲームここは、何色？」）です。６～10ヶ国の言語で表記された色の意味を調べて、指定された部分にその色を塗っていくと絵柄が浮かび上がってくるというものです。言語や言葉の多様性に触れながら、言葉の意味を調べていくこと、さらにわかったときの喜びを味わってもらうというのが大きな狙いです。

＜ワークシート例＞

＜解　答　例＞



そして、12月7日（日）に開催された滋賀県国際協会主催の「多文化子ども広場」（ピアザ淡海）で、実際にワークショップを行うことができました。対象者は、日本をはじめ多国籍の子どもたち（３歳～10歳程度）。年齢に幅があり、さらに多国籍となれば、ルール説明にさぞ時間がかかるかと思っていましたが、親子連れが多かったこともあってか、意外とスムーズに進めることができました。

今回の大きな目玉は、わからない言葉をいろんな国の人に直接聞いて教えてもらうということです。会場内にいた様々な国や地域の方々に言葉を教えてくれるナビゲーター役をお願いし、子どもたちはナビゲーターを探しながら、自分の知りたい色の意味を読み解いていきます。

一斉に会場に散らばった子どもたちは、ナビゲーターを探し出し、自分の知りたい言葉が何色を意味しているのかを聞いて回ります。

言葉の意味がわかるたびに「なるほど」「へぇ…」と感嘆と喜びの声を上げ、少しずつ浮かび上がる絵柄に夢中になる子どもたち。そこには、思いがけない発見や気づきがあったようで、「知らない国の言葉がいっぱいあることにビックリした」「僕は英語だってわかるよ」「読み方も教えてもらった」「これってタイ語なんだ」

イエメンの方にアラビア語を教えてもらったよ。

ブラジル人学校の子どもたちも参加しました。

ぬり絵に取り組む子どもたち

「これってなんて書いてあるの？」

と、楽しそうなコメントをたくさんいただきました。ナビゲーター役の方々の温かい協力もあって、会場全体を巻き込んだダイナミックなワークショップになりました。

今回のワークショップで見えてきたこと、それは子どもたちにとって「目に見える成果があることは非常に重要なこと」、「わからないことを聞くことは立派な異文化コミュニケーションであること」、「言葉の意味がわかるということは喜びを感じること」などでした。

今後の課題としては、こうしたダイナミックなアクティビティを教室内でどのように表現するのか。さらには、単なるゲーム感覚ではなく、いかに「非識字体験」をさせることができるかなどがあります。特に、どのように調べさせるのかがカギとなります。ナビゲーターに代わる方法も考えなくてはいけません。どこかに辞書を置いておく、それぞれに手がかりやヒントとなる情報カードを持たせるなど、様々な方法が提案されていますが、今もまだ思案中です。まだまだ改善の余地が多い教材ですが、今回のような実践を積みながら、より良いものにしていきたいと思っています。

滋賀県国際協会主催　国際理解講座
「CO_2の排出って…？世界がもし100人の村だったら<環境編>」を開催しました。

ファシリテーター　国際教育研究会　Glocal net Shiga　　大槻　一彦さん
開催日　平成21年２月７日(土)　10:00～11:30
会　場　ピアザ淡海２階　204会議室　　参加者　41人

今回は、地球環境や世界と私たちの関わりについて関心を高め、理解を深めることを目的にワークショップを開催しました。

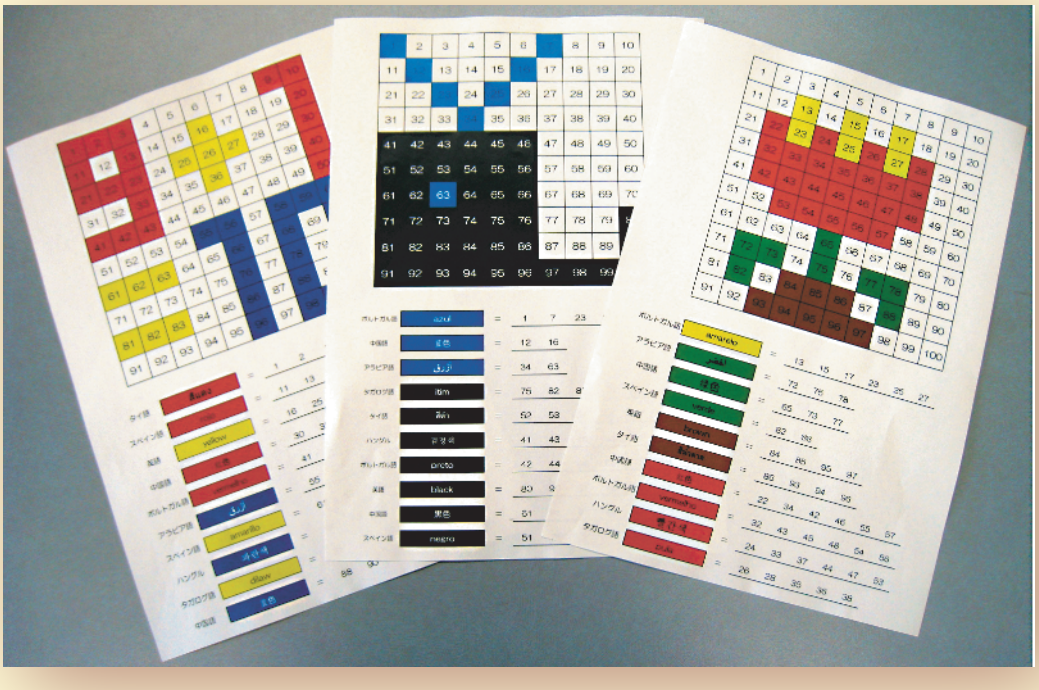
導入として、「世界がもし100人の村だったら」のデータに基づき、世界の人口推移や、世界の経済力をラムネに見立てて、地域間にどれほど経済格差があるのかを体験しました。次に、４人一組になり、トランプが配布され、ゲームを始めるように指示されました。先進国役のグループには、たくさんのトランプが配られたのでゲームを楽しめましたが、途上国役のグループには、トランプが１～２枚しかなかったので、ゲームすら成立しません。しかし、次に「では、みんなで一緒に平等に片付けましょう」とファシリテーターから指示されました。「実は、このトランプは、CO_2の排出量を表していました。先進国はたくさんCO_2を排出しながら楽しく過ごし、途上国はCO_2排出量は少なく、快適とはいえない環境で暮らしていることを体験しました。」という解説を聞き、「なるほど！」という表情に参加者の顔が変わりました。みんなで一緒に平等に片付けるという考えは、途上国からすれば不公平に映る理由が理解できたのではないでしょうか？

先進国役のグループ

途上国役のグループ

続いて、世界の水について考える活動を行いました。10人の人が一列に並んで、１０のペットボトルの飲み物を、それぞれ配布されたコップに印のついた位置まで順番に注いでいくというものです。しかし、目印の位置まで入れると、後ろの人たちの分が足りなくなってしまうことに気付き始めた参加者は、少しずつ遠慮がちにコップに注いでいきました。参加者からは、「自分がたくさん注いでしまうと、後ろの人に残るか心配でした。でも、もし後ろに人がいることがわからない状態だったら、何も考えずに目盛の位置までためらうことなく注いでいたと思います。」という感想が聞こえてきました。

「私たちは、世界の中でいったいどういう位置にいるのか？そして、私たちは生活の中でどのような努力をしていくべきか、他の人たちがどのような生活を送っているかに目を向けるなどして、個々のレベルでも考えていただきたいと思います。」と大槻さんが締めくくられました。



「非識字体験ゲーム　ここは、何色？」より

宝くじは
豊かさ築く
チカラ持ち。
宝くじは、広く社会に役立てられています。